

ヨゼフ会便り



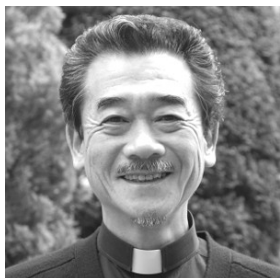
発行者 ヨゼフ会 横浜市中区山手町 44 番地 カトリック山手教会内

第 57 号 2025 年 12 月 20 日発行

Ⅱ「聖年」という恵みの時を

終えるにあたって

主任司祭 鈴木 真



教会報「やまて」にも書きましたが、今年の通常聖年において、ここ山手の聖堂が教区唯一の指定巡礼地ということで、本当にた

くさんの巡礼のグループを迎えることができました。

そして山手聖堂の説明を求められれば、なるべくわたしが対応させて頂きましたが、実はそれには理由がありました。いつもお話するように、わたしは長年横浜雙葉で働いていますが、なんと 21 年にわたって中学一年生の宗教科を担当しています。

わたしが担当するようになってから毎年、中 1 宗教科の年度の最後に、教会訪問ということで山手教会にクラスごとに学年全員に来てもらっています。そこでわたしが聖堂の説明をするわけですが、長年やっているうちに、これツアコンできるんじゃないか…みたいな変な自負を持つようになりました。そのため自分なりに山手教会の歴史や今の聖堂のことも調べたので、今年の聖年にはぜひ聖堂の説明をさせて頂きたい！と思ったわけです。でもやっているうちに自分の思い上がりだったということに気づかされました。教会報に書いた「ネポムクのヨハネ」のことも含めて、まだまだ知らないこと、そして気付いてなかったことがあるんだ…ということの発見があり、それはわたしにとって大きな恵みでもありました。

まず初代の横浜天主堂が献堂されたのは 1862 年、実はわたしが生まれる 100 年前です。これは覚えやすいしネタにできる…といつも話していたのですが、今年は天主堂の記念碑のパンフレットも作って頂いて、それを見て驚きました。あの記念碑がつくられたのが、献堂 100 周年の時、つまりわたしが生まれた年だったんです。なんと！とこれも新たな喜びと気付きました。

また様々な教会の方々が巡礼に来て下さって、嬉しい出会いやそして再会も多くなりました。11 月にはわたしの出身教会である由比ガ浜教会のグループを迎えて、懐かしい方々とひとときを過ごすことができました。



そして今更のように気付かされたのは、横浜天主堂以来受け継いでいるものが少なくとも 2 つある、ということです。それは駐車場にある聖母像と、今でも鳴らしている「鐘」です。これも記念碑のパンフレットに載せられた横浜天主堂の絵を見て、そうだった！と思いました。それぞれに由来やエピソードがあるわけですが、献堂以来 163 年に渡って山手教会にあり続けるものがある、ということは、今のわたしたちにとっても大きな恵みですし、また当たり前のことながら、人の人生の時間を大きく超える「聖堂」という神さまから与えられた場がある、

ということに改めて感動しました。

聖年を祝う、ということの中には色々な意味がありますし、その意味や歴史に目を向けることも大切ですが、何よりもこの「聖年」という時を通して、神さまがはたらいておられたこと、それも思いもよらない形や機会に行われた神さまのわざに、心から感謝しています。

次の聖年つまり 25 年後はもう自分は生きてないだろうな…と置いていたら、なんと 2033 年(イエスが十字架にかけられてから 2000 年という年)に特別聖年があるようです。あと 8 年、まあそこまでは生きていられるかなあ、などと思いながら、わたしたち人間の営みの中でいつも不思議な形ではたらいておられる神さまのわざに感謝し、これからも目を向けていきたいと思います。



Ⅱ 宇野義也さんを偲んで

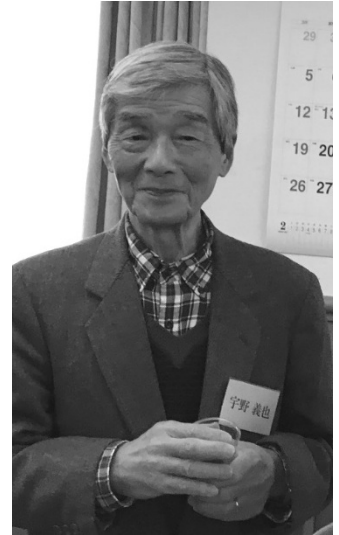


澁谷 信男

朝のすがすがしい空気の中、先唱をつとめる宇野さんの声が聖堂に響き渡り、黙想会の参加者は聖歌と祈りの中で静かなひと時を過ごしました。コロナが蔓延する前、ヨゼフ会は毎年、鎌倉のイエズス会黙想の家で泊りがけの黙想会を行っていました。木々の緑に包まれた美しい庭園をゆっくりと散策しながらロザリオの祈りを唱えたり、個室で一人静かに自分の信仰を見つめたりして貴重なひと時を過ごしました。指導司祭の講話

を聞いた後、皆でテーマごとに話し合いを行って自らの信仰を見直すきっかけにしました。宇野さんがいつも積極的に意見を述べられていたのが今でも印象深く思い出されます。

朝は食事の前に聖堂でミサが催され、宇野さんはいつも先唱を引き受けてくださいました。学生時代にカトリック研究会に所属して未信者相手の講演会などで世話役をした経験から、ヨゼフ会の黙想会でも積極的に会員の世話をしてくださいました。



幼少のころ、父親の仕事で仙台に長く住んでいましたが、その頃通った教会のフランス人神父の影響でフランス文化に強い関心をもたれたようです。慶應義塾大学では、フランスのルイ王朝の歴史を専攻して教員免許を取得しましたが、卒業後は製薬会社に就職し一年の半分かくらいを海外で過ごしていました。宇野さんが醸し出す日本人離れした雰囲気はこのような環境で培われたのかもしれませんが。

クラシック音楽が大好きで、外国に滞在中も家にいる時もいつもクラシック音楽に耳を傾けていました。

2000 年の大聖年ヨーロッパ巡礼旅行は、宇野さんにとって信仰の節目となる大きな機会となりました。私も家内と一緒に参加しましたが、引率してくださったバーク神父様との旅行は、参加者全員に深い感銘を与えてくれました。ローマ滞在中は浜尾枢機卿様も私たちに参加してくださいました。炎天下のバチカン広場で教皇ヨハネパウロ二世の説教を聞きながら巡礼者は信仰への思いを新たにしました。ルルドでは、小雨が降る中、全世界から集まった巡礼者と一緒にアベマリアの祈りを唱え感動のひと時を過ごしました。聖母ご出現の洞窟前で水浴の機会を与えられ、巡礼者は冷たい水にひたって罪の許し

を乞いました。私のような罪深い者がルルドの水を汚すわけにはいかないと水浴を拒んでいましたら、天野さんが強引に私の手を引いて水浴させてくださったのが忘れえぬ思い出になりました。



ルルドの聖母大聖堂



ルルドのミサ

宇野さんは2013年に胃がんの摘出手術をしてからいつも死と向き合っていたそうで、ヨゼフ会便りに投稿された手記の中で、宇野さんは、病を得て、信仰に生きているか自分を反省、吟味する機会を与えられたと述べておられます。私は2年前に立花隆の著作「臨死体験」を読んでから死後の世界に強い関心をもっていましたので、宇野さんと死生観を語り合う機会を持てなかったのが残念です。

病を得た後、宇野さんは細くなった体を労わりながら山手教会のミサにあずかっておられました。今年の3月後半から一人での外出が難しくなり、4月以降はお嬢様が付き添ってミサに来られていました。今年のイースターが最期のミサになったようで、宇野さんが危うい足取りで聖堂から出てこられたのを

見て、思わず、「大丈夫ですか？」と声をかけてしまいました。「大丈夫ですよ！」と力強く応えられたのでしばらく立ち話をしましたが、それが宇野さんにお会いした最期になりました。宇野さんは、残された力を振り絞って山手教会にお別れに来られたのだと思います。

6月に奥様を亡くされた宇野さんは、7月15日に神様の御許に旅立たれました。葬儀では、宇野さんの生前の希望で、声楽家をされているお嬢様のご主人がフォーレのレクイエムを独唱され、美しい歌声が響き渡る中、宇野さんは大勢の参列者に別れを告げました。私も既に80歳。宇野さんを見習って死生観をしっかりと築くことができるように残りの信仰生活を深めていきたいと思っています。

『ピエール・スベストル著 『キリスト者と日本人』

稲見 友一



ICC まとめ役のピエールさんの長年の研究成果をまとめた本が昨年出版されました。内容豊かな大著なので、ここでは十分に

紹介しきれないのですが、私たちの共同体の仲間が実らせた果実を、その香りだけでもみんなで味わい喜び祝いたいと思います。

「日本におけるカトリックの歴史」という副題がつけられ、全5部20章から成り立っています。

第1部 ザビエルが日本に来た経緯と目的

第2部 1549ー70 開拓者の時代

第3部 1570ー87 教会の確立と最初の失敗

第4部 1587ー1873 迫害の時代

第5部 1873以降の現代

第1部は日本宣教の前史で、当時のヨーロッパ、特にイベリア半島の事情が語られます。日本宣教がポルトガル国王の宣教保護(パドロード)によることが指摘されています。

第2部はザビエルとコスメ・デ・トレスが宣教の

基礎を作っていく過程が描かれます。日本の歴史や文化に馴染みのない読者にも、随所で簡にして要を得た情報が与えられており、その点でも貴重な書物になっています。

第3部の冒頭でザビエルがとった方針が現地文化の「受容」であったことが述べられて、ザビエルとトレスの後を継ぐカブラールの活動が描かれます。この辺りの日本の事情、信長や有力大名についてはもちろん、宗教事情なども実に詳細に記述されていて驚かされます。ご存知の通り信長のもとで順調に進展していた宣教ですが、秀吉のもとでバテレン追放令が発せられ壁につき当たります。

第4部では布教の禁止から信仰の禁止へと迫害に拍車のかかっていく時代を扱います。小さなことですが、時代の区切りが1873年までとなっていることに注目です。普通の日本史なら明治維新が区切りとなって1868年になるでしょう。しかし本書ではキリシタン禁制の高札が降ろされた時点を区切りとしています。

第5部はそれ以降、現代までですが、再宣教とともに、戦時体制および朝鮮・中国（満州）等の教会事情、そして最後に現在の状況が語られます。

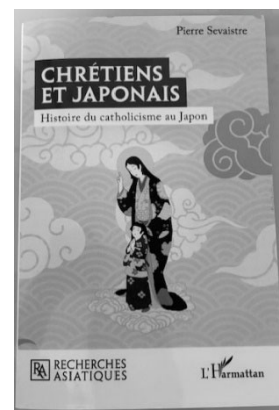
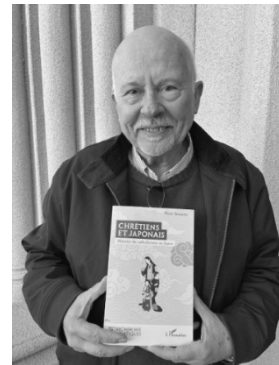
一読してわかるのは、実に詳細な情報が詰まった書物であると同時に、一貫した視点から描かれた大河ドラマのような読み物になっているということです。詳細な、しかしこの分野の初学者にも配慮した記述は、この本が永く参照すべき基本図書となることを約束しています。一貫した視点というのは、変わることはない永遠の真理である福音が人間の手を通して、宣教地の文化に適応した形で伝えられていく姿を見つめているからです。

私たちに馴染みの深い歴史やエピソードなどが、バチカンや宣教師たち相互の複雑な関係の中に織りあわせられ、新鮮な相貌を見せます。「あっ、そういう事情があったのか」と何度も思わされたのは、単に私の知識不足のためだけではありません。

印象に残った多くの箇所から一つだけ紹介します。再宣教の中心となったパリ外国宣教会が採った方法

に「旅する宣教」と呼ぶべきものがあります。宣教師と日本人の2・3人一組で実際に街道を歩きながら宣教するものです。これに携わった宣教師の中で、私たちにとってテストウィード師の名が馴染み深いものです。著者はこの宣教方法について、このように指摘しています。「これにより、聖堂を建て、新しい信者を得、伝道所を作りカテキスタを養成した。さらに、これに献身する宣教師を変えることにもなった」とあります。パリ宣教会はキリシタン時代のイエズス会に比べて厳格だったと言われますが、この旅する宣教は「宣教師たちの視野を広げ、柔軟なものにした。そして、出会う人々をよく知り尊重することを学ばせることになった」と書いています。神があえて長い時間をかけて、人から人へと福音が伝えられるのを望まれたことの意味がわかるような気がします。

著者は「結論」で、現在の日本の教会にとってのチャレンジは、宗教的無関心への対応と外国からの移住者の日本社会への統合であると指摘して筆をおきます。なお、書名は『キリスト者であり日本人であること』と読むこともできます。



Ⅰ 『ことば』が心に残してくれるもの



村田 義光

3 年前、ヨゼフ会便りに寄稿させていただいた際は、まだコロナ禍のまっただなかでした。当たり前ではなかったことが、次から次へと新しい常識に置き換わった時でもありました。そのことがむしろ、私たちの内にある大切なこと、人と人とのつながりが何よりも欠かせないのだということを、一層深く実感させてくれた、といった内容を書かせていただきました。そして今、私たちはますます新たな変化の時代の中にいるのかもしれない。

私は会社のシステム管理を担う部門で働いており、昨今は特に生成 AI の話題に触れない日はないと言っても過言ではありません。生成 AI のチャット GPT に初めて触れたときに得られた、まるで実際に人と会話しているかのように錯覚してしまうような感覚は、これからの世の中を大きく変えていくような凄いものが出てきた、と予感させてくれました。

そしてその予感通りに、今まで想像もできなかったようなことを生成 AI はやってのけてくれます。人が言葉で指示を出すだけで面白い動画を作ってくれたり、個人的な話題の相談相手になったり、ややこしい書類を読ませるだけで、読みやすい要約を返してくれる……。人が手をかけてやってきたことを肩代わりすることで、どんどんと省力化とスピードアップにつながっています。

その一方で、使う人の想像力や表現力の低下が懸念されています。早く結論に辿り着けさえすれば良い、得られた回答の意味すらわからないような人でも、それなりの結果が得られてしまう。

ただし、単に生成 AI が悪いということではありません。例えば、短い時間でいろいろな情報を得られるがために、時間さえあれば動画サイトのショート動画や早送り再生で次から次へと様々なコンテンツを消費していく、このような習慣が続くこともま

た、文章の行間を読む力や、相手に物事を伝える表現力の衰えに繋がってしまいます。

ここで、「ことば」について改めて考えてみました。生成 AI は言葉をデータとして扱います。このデータを計算機にかけることで、素早く大量の回答(データ)を返してくれます。それが人に寄り添ったような言葉遣いをしていたとしても、そこには「心」はありません。

世界は神様の「光あれ」というみことばから始まりました。そして似姿としてつくられた人もまた、ことばを使って様々な被造物に名前を付けて呼び、ほかの人とことばを使って心を通わせてきました。



富士山で迎えた早朝の光

生成 AI が扱う言葉と、心のこもったことばには、大きな違いがあると思います。

私はある日、ことばの力について、ある意味の気づきのようなものを得たことがありました。

とある人が、ミサに与る際は「聖書と典礼」の冊子を目で追うのではなく、ことばを耳で聞き、心に落ちてくるものを味わうようにしてみると、また一つ違うものを感じられるかもしれません、と言われているのを耳にしました。恥ずかしながら、私はそれまで「聖書と典礼」は台本のように終始文字を目で追いながら読むのが普通だと思っていました。ある日のミサでそのことを思い出し、朗読で語られる聖書のことばを、文字で追うのではなく耳だけで聞くようにしてみました。すると不思議なことに文字を追いながら聞くよりも深く、聖書のことばが自身に入ってくるのを感じることができたのです。記録

媒体である文字という情報がない方が、むしろ聖書で呼びかけられていることが心の中に響いてきます。そうすることで、朗読後の沈黙の時間に大きな意味を感じることもできました。データや記号として扱われる言葉と人の心に響くことばは、大きく違うものなのだということが分かったのです。

生成 AI はこれからも強力な道具として多くの人に使われることになるのでしょう。そしてさらに便利で効率的で、いろいろな価値や常識を生み出していくのかもしれませんが。そんな流れの中であるからこそ、私は記号やデータではない「ことば」に耳を傾け、そのとき自分の内に入ってくるものとじっくり向き合う姿勢を、これからも心に留めて行きたいと思います。

Ⅱ 私が洗礼を受けるまで



松崎 尚介

こんにちは。今年 4 月に受洗しました松崎尚介です。今回はこのような機会を頂き、ありがとうございます。仕事のことや洗礼を

受けることに決めた理由などを、自己紹介も兼ねて書いていこうと思います。

・ 出身地など

神奈川県茅ヶ崎市の出身で、現在は東京に暮らしています。年齢はもうすぐ還暦を迎えるところです。趣味は、昔はテニスをしていましたが、最近はおっぱらゴルフを楽しんでいます。

・ 仕事のこと

鉱山会社で働いており、長く営業を担当してきました。会社は国内では石灰石、海外では銅鉱石の採掘を行っています。

「資源の少ない日本で鉱山？」「石灰石って何？」と思われる方も多かもしれません。しかし石灰石は、国内で唯一 100% 自給できる鉱石で、年間 1 億トン以上生産され、一部はオーストラリア、台湾、中国にも輸出されています。用途はセメントや鉄鋼

の原料をはじめ、建設資材、製紙、農業、食品など多岐にわたり、実は我々の生活を支える欠かせない資源です。セメント 1 トンを製造するのに石灰石が約 1 トン、鉄 1 トンを製造するには石灰石が約 0.2 トン必要であり、その重要性を感じていただけたと思います。

私は 30 代後半に高知へ転勤し、石灰石鉱山で勤務しました。仕事はもちろん、高知の自然や豊かな文化に触れたことは大変貴重な経験となりました。

・ 高知での思い出

高知の鰹のたたきは、県外と比べものにならないほど美味しく、スーパーにも常に大量に並んでいます。4 年間の滞在で「一生分食べたのでは」と思うくらい食べたと思います。ポン酢やたれもよいのですが、高知では“塩たたき”も人気です。塩を少しつけ、ニンニクスライスとみょうがで食べる厚切りの鰹は格別で、「司牡丹」「土佐鶴」といった高知の淡麗辛口のお酒とよく合います。そして飲み過ぎた翌日には、須崎名物の鍋焼きラーメンの、土鍋で煮込んだ熱々の鶏ガラ醤油スープが身体にしみわたりました。

また、高知といえば四万十川が有名ですが、“仁淀ブルー”で知られる仁淀川も大変美しい清流です。溪谷や沈下橋が続く、アユ釣りやカヌーでも人気です。我が家の愛犬も、最初は水を怖がっていたのですが、仁淀川で遊ぶうちに水が大好きになり、楽しい思い出となっています。

・ 洗礼を受けようと思った理由

妻は数年前から教会のお手伝いを続けており、その影響で、私は時々ミサに参加するようになりました。中学・高校時代はカトリック学校に通っていましたが、当時は全く関心がなく、神父様のお話も眠くて仕方がなかったように記憶しています。それが思いがけず、久しぶりに参加したミサの時間がとても心地よく感じられたのです。

ちょうどその頃、山手教会で講座が開かれることを知り、昨年一年間、木下先生のクラスをととても楽

しく受講しました。特に印象に残っているのが、善きサマリア人のたとえ話です。

「神様への愛と隣人愛は大切だが、どこまで、どのように関わればよいのか？」

木下先生は、旅人が“自分にできること”をしたうえで宿屋の主人に介抱を託したことを示し、「自分の出来る範囲で良い」と教えてくださいました。その言葉が自分の中で腑に落ち、気持ちを楽にしてくれました。洗礼の際には代父の末澤さんからも「ペースを上げ過ぎず、無理しないように」と助言を頂き、感謝しております。

信仰心がどれほどあるのか、と問われれば正直自信はありません。ただ、妻と同じキリスト教的世界観を共有するのもよいのではないかと。そう思ったことが、洗礼を受けようと決心した一番の理由です。

聖書は理解が難しく、なぜこのように厳しいことが書かれているのだろうと感じる場面も多いのですが、同時に奥深いものだと感じています。教会という共同体での出会いやつながりのご縁を大切にしながら、少しずつ理解を深めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



Ⅱ ヨゼフ会活動報告(8月～12月)

主日ミサの会場案内、福祉委員会と共同でミニカフェ等の奉仕活動を行いました。

- ・ 8月15日(金) : 聖母被昇天ミサでの案内
- ・ 8月30日(土)～「聖年記念」として聖堂の写真を印刷したミニ団扇を作成、自由献金でミサ・巡礼訪問者へ配布し好評を得ました。
- ・ 9月21日(日) : ロザリオ会主催の講演会
「人生に寄り添う音楽」を福祉委員会と共催。
- ・ 10月4日(土) 5日(日) : 避難訓練

各ミサ後に地震発生を想定した聖堂からの避難訓練で避難者の誘導に当たりました。毎年恒例になり短時間で安全な避難が可能となりました。



- ・ 11月1日(土) : 帰天者のための追悼ミサ

昨年10月から今年9月の1年間に帰天された当教会所属の男女信徒39名の方々を追悼するミサを、主任司祭の司式により、ロザリオ会と共同で捧げ、ご遺族・参列者併せ59名の方が参列されました。来年は11月7日(土)を予定。



・ 11 月：木曜パトロールの支援

「木曜パトロール」活動を支援するため毎年行っている下着類の提供を今年も行いました。

・ 11 月 23 日(日)：教会学校初聖体の子供たちにお祝いを進呈しました。

・ 11 月 23 日(日)：映画上映会

待降節を向けて映画「マリア」の上映会を開催、15 名の参加者があり好評を博しました。

来年の復活祭前には「復活 RISEN」という映画の上映会を計画しています。



・ 12 月 7 日(土)：聖堂、教会ホールの大掃除

聖堂、教会ホールの大掃除に参加しました。

・ 12 月 20 日(土)：ヨゼフ会便り第 57 号発行

・ 12 月 24 日(水)：降誕祭ミサ奉仕

今年も雙葉学園講堂で日本語・外国語共同で開催されます。ICC メンバーと共同でミサ会場の準備、誘導・案内、片付け等の奉仕を行います。

Ⅱ ヨゼフ会活動予定(1 月～4 月)

・ 1 月～2 月：ヨゼフ会総会開催予定

・ 4 月：ヨゼフ会便り第 58 号発行予定

※来年から年 3 回の発行とする予定です。

Ⅱ 会員消息

- ・ 次の方が帰天されました。永遠の安息をお祈りいたします。

帰 天 日	洗礼名	氏 名	享 年
2025/08/19	ヨゼフ	前田華郎様	92 歳

Ⅱ 編集後記

「どなたか私を上にあげてください」もう 46 年前になる。1979 年秋、私が 25 歳会社員になりたての頃放送された NHK テレビドラマに男たちの旅路 車輪の一步(脚本山田太一演出中村克史)があった。

ドラマは、鶴田浩二演じる警備会社吉岡の目線で車いすの少年少女の生きづらさが描かれていた。

私はその当時は障害者に対して知識があまりなかったと思う。今年に入り私自身循環器疾患で入院手術を経て、内部疾患で身体障害者になり、この降誕祭とともに自分を思いなおす良い契機になった。

46 年前である、登場人物の車いすの少年少女たちは街のどこへ行っても迷惑がられ、面倒くさい顔をされる。電車に乗るなんて夢のようだった。脊髄損傷で引きこもっている少女を外に連れ出そうと少年たちは少女を近くの公園に連れ出す。しかし帰り道少女の車いすが踏切で立ち往生、失禁してしまう。

終盤、吉岡は母親と少女に対面する。母親に「お嬢さんを外にださなきゃいけないということを知っている。お嬢さんはあなたと一緒に死ぬわけじゃない」少女に「君はお母さんのいうなりになっている。いうなりになっていれば、お母さんを恨むようになる」「みんな一緒に強くなろうと待っている」

少女は改札まで 10 段階のある豪徳寺駅に心を決めてひとり向かう。少年たち、吉岡が見守り、後で母親が駆け付け陰で見つめる中、少女「(小さい声で) 誰か」「(やや大きい声で) 誰か私を上にあげてください」「(大声で) どなたか私を上にあげてください」 通行人の何人かが協力して少女を改札まで上げてくれる。少女の笑顔。母親はその姿を見て駅の自転車置場で泣き崩れる。ちなみに私の母親はそのシーンを赤羽の自宅で一緒に観ていて泣いていた。

現在、身体・知的・精神障害者に対しての理解、福祉の法整備など変化が著しい。駅も施設もバリアフリー、ただ高齢化で障害者が増えているのも事実。

「どなたか私を上にあげてください」少女の勇気ある小さな一步を忘れない。祈りのうちに。(坪井暢)